

**Y K K****読もう書こう考えよう**

みなさんこんにちは、図書館担当の伊丸岡です。

ことしは降雪が遅いが、はたしてどんな冬になるんでしょう。数年前、見学旅行に出発する日の朝、相当な量の重た〜いみぞれ様の雪が積もり、学校に来るのが大変だったときがあります。10月の話です。



今月は「師が走る」と書いて「師走」。何かと気ぜわしい師走。御用聞きの子ちゃんなら「ちわーす」というところか。

しかし、毎月YKKに月の異名を掲げ、月の最初の授業では、その月の異名を確認するところから授業を始めているのですが、今回の3年生の古典のテストで、12月を「しわす」と読めなかった人の何と多かったことか!がっかりです。

さて、12月の声を聞くと、山下達郎の「クリスマスイブ」を耳にする。「兄は夜更け過ぎに〜雪絵と変わるだろう」。一度この替え歌を聴いたら、もう正しい歌詞では聞こえなくなるから不思議です。

考査も終わって一段落と言ったところですが、3年生は年明けの一般入試を目指して頑張っている人も多いことでしょう。ボクらも推薦入試の小論文添削やら面接練習やら、実に大変な日々でありましたが、後輩諸君に一言アドバイスするなら、「ものを知りなさい」。時事問題、社会情勢に敏感になりなさい。じゃないと、いい小論文は書けませんから。そのためにも、この通信を書いています。読もう、書こう、考えよう。読むべきものはたくさんある。考えるべきこともたくさんある。

中学生まではたくさん本を読んでいたのに、高校生になってほとんど読まなくなったという人は多いと思います。普段読まない人が、普段考えない人が、受験直前になって急に、課題文を読解したり、意見文を書いたりはできません。

普段から読もう。書こう。考えよう。

そのために、読んだり書いたり考えたりするきっかけ作りのために、こうして大量の紙を使って印刷して、一人ひとりに届けています。わりとてまひまかけて・・・。「てまひま」・・・プロノさんのチラシのタイトルです。

紙は文化のバロメーター

古い話で恐縮ですが、中学生だったころ、文化祭のパンフレットに、「紙は文化のバロメーター」という、生徒会長の挨拶文を載せました。文化祭を実行するに当たって、企画書や広報活動において、どんどん紙を使おう、紙の使用量が企画を練り、広報を活発にした証だ、という趣旨でした。人類の歴史を見ても、紙の普及が記録を確かなものにし、伝達を地域的にも時間的にも広範に広げていったことから、「紙の使用量は文化発展のバロメーターたり得る」というような趣旨だったと思います。



しかし時代は「エコ」「地球環境保護」「省資源」「省エネルギー」さらには「デジタル化」と進み、「ペーパーレス」が当然であり、紙を使うのは時代遅れの罪悪行為であるかのようです(企業の財務・人事管理システムを売り込むコマーシャルでも「ペーパーレス」を謳っています。DXです)。

新聞や雑誌の発行部数が激減し(つまり購読者が減り)、街の書店がどんどんつぶれていく(つまり本屋で本を買う人が減る)時代です。

でも、やっぱり手元の紙に書かれた情報を何度も読み返す。二度見、三度見ではないが、何度も立ち止まって考えたり、読み返すことのできるのはやはり「紙」の情報に勝るものはない。残念ながらネットの情報は、文字や言葉遣いからして、いい加減なものも少なくない。

何度も読む、読み返すために。考えるために。そして、何度も推敲して文章を練り上げてゆくためにも紙がいい。ぱぱっと打ち込んで、ぱぱっとネットにアップした文章には内容の浅いものもできてしまう気がするんだよね。

～ ことばつれづれ ～

けんもほろろ

「けんもほろろ」という慣用句があります。言葉としては知っていても、実際にそんな場面に遭遇することは滅多にありません。その、滅多にないことに先日、遭遇しました、ありがたいことに(滅多にない=有り難し)。

公的な用務で、他校の教員に問い合わせの必要が生じたため、一応丁寧に手紙を出してみました。その返答が電話であり、まさに「けんもほろろ」な答えて、古語で言う「あさまし(驚きあきれる)」でした。

ところでこの「けんもほろろ」の語源や意味を知っているでしょうか。例によって、いくつかの辞書に当たってみることにしましょう。

【広辞苑】無愛想に人の相談などを拒絶するさま。とりつくすべもないさま。

【大辞泉】人の頼み事や相談事などを無愛想に拒絶するさま。とりつくしまもないさま。

【明 鏡】冷淡で、とりつくしまもないさま。

【新明解】人の頼みなどを冷たくはねつけて、受け入れようとする態度を全然見せない様子。

【三 国】少しもく同情の心／あたたかみがないようす。

まさにどの説明もあてはまる電話のお相手でした。



○丸岡さんですね？

電話対応の話題をもう一つ。

年賀状印刷の時期となり、自宅のプリンタのインクカートリッジを交換したところ、プリンタが作動しない。販売店に聞きに行ったら、仕様がカスタマイズされており、そこに同封されている連絡先に連絡してと言う。超有名なメーカーだ。そこで電話してみたところ、どうやら引き取りに来て、プリンタの方を改修してくれるらしい。

一通り説明が終わり、引き取り先の確認、つまりはお客さま情報の確認だ。これがいつも悩みの種。「イマルオカケイイチと申します」「丸岡さんですね？」「イマルオカです」「ヒマルオカさんですね」「(なんでこのヒト、ボクの自虐ネタを知っているんだろう?)」「いいえ、イマルオカ(ゆっくりと、区切るように)です」「どのような字でしょうか」「にんべんの、伊藤さんの伊に、牛若丸の丸に、岡山の岡」と、こういうやりとりはこれまでの人生で何百回、何千回繰り返してきたことだろう。

最後に、最終確認で復唱するという。あれほど説明したのに、「丸岡さまですね」「へ？」「あ、へ丸岡さまですね」「さっき、にんべんの伊藤さんの伊って言ったでしょうが？」というやりとり。いったい「へ丸岡」って、どんな字を書きゃいいんだよ？この年になっても初めて聞かされる珍名字に出会うことである。世の中のメズラシイ名字の方には、日頃のご苦勞に深く敬意を表する次第です。

さらにその後電話番号の確認でも、「016の、624の・・・」と続ける。さっき「0166の、24の・・・」と説明したのに。「変なところで切るんですね？通しては合っていますけど」と言っちゃいました。

ものすごく個性的なオペレーターでした。

マデ マメシー

北海道方言(浜言葉)のなかでも、ボクが好きな言葉は「マデ」と、「マメシー」です。これは褒め言葉で、ボクが「言われたい言葉」ベスト2です。

「マデ」とは「マテ」とも。広辞苑や大辞泉にも「まで」は載っています。いずれも漢字はなく、語源も不記載。

【まで】

【広辞苑】実直なさま。真面目。律儀(りちぎ)。

【大辞泉】実直なさま。ていねいなさま。まてい。

「**マメシイ**」とは形容詞で、「マメだ」という形容動詞でも使われます。国語辞典には「まめ」という形の名詞しか載っていません。漢字は「忠実」という字を当てるようです。関連部分を挙げると、

【まめ】

【広辞苑】労苦をいとわずよく勤め働くこと。

【大辞泉】労苦をいとわず物事にはげむこと。また、そのさま。勤勉。まじめであること。また、そのさま。実直。本気。誠実。

【明 鏡】面倒がらないで物事にはげむこと。

【新明解】きちょうめんで、努力を惜しまない様子だ。まめやか。

【三 国】まじめ。かげひなたがないようす。めんどうがらないようす。

話は逸れるが、『三国』のちょっと横に視線をずらすと「マヨ」が載っていた!語釈:マヨネーズ。使用例「マヨラー」(マヨネーズ好きの人) ……紙の辞書はこういう出会いが面白い!

『**北海道海岸方言辞典**』(見野久幸著)はボクの愛読書の一つですが、こんな説明が。

【マデ】ていねいな。几帳面な。浜とは限らぬが、マデにするのマデはもともと双手・もろ手である。片手で横着するな、マデでせよというのが本義であった。万葉集では助詞の「まで」に「左右手」という漢字を当てている(いわゆる万葉仮名)。用例「コノ キモノ、マデニ ヌワナキャ ダメダヨ」

【マメシ】よく体が動くさま。勤勉であるさま。用例「マーマ マメシ コダワ」

子どもの頃、近所のおばさん方が「やんや、マデなこと」と、人の仕事や行為を好意的に褒める使い方を好んで思っていました。また、「あの人だら、まず、マメシんだわ」という言葉を耳にするたび、そんな風に言われる大人になりたいと思ったものでした。

子どもの頃覚えた言葉の多くは、おばさん方から教わったような気がするのですが、それは、おじさん方は仕事に出ていて、そこらでおしゃべりしている姿など、あんまり目にはなかったからかもしれません。

それにしても、かなり浜言葉の強い地域でありました。

前号で、ボクの出身地を「魚臭い街」と言いましたが、そこら中に「水産加工場」があって、屋外に木(サキリといいます)で組んだ魚干しに大量の魚を自然乾燥させるものだから、とにかく臭かった。その水産加工場のことを「カコーバ」と言いましたが、うんと小さい頃には「ニシンバ」と言っていたように思います。「どこそこのだれそれは、ニシンバさ行ってる(加工場に働きに行っている)」という使い方です。

『北海道海岸方言辞典』によれば、「ニシンバ」は、ニシンを獲る漁場、と説明されていますが、ボクの記憶では、「カコーバ」のことを古くは「ニシンバ」と言っていたように記憶します。だって、ボクが生まれた頃にはもうホントの「ニシンバ(鯨の漁場)」はなくなっていたのですから。

ちなみにこの本、何度も紹介していますが、啄木の歌、「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きに行く」のごとく、この本を開くと、懐かしいふる里に戻ったような感じにさせてくれるんです。

分水嶺

11月7日の朝日新聞に「バイデン政権 分水嶺」とありました。米国中間選挙直前の報道の見出しです。

分水嶺……正しく読めましたか?まさか「フンスイリョウ」なんて読んだ人はいないでしょうね?

地理なんかで習うのでしょうか?もともと地理の用語なのですが、比喩的に用いられることも多いからね。

地球の歩き方～留萌本線編 (ちょっと大きく出てみた)

前にも書いたんだけど、留萌本線の石狩沼田～留萌間が3月で廃止になります。これから積雪の時期になりますが、この路線にある「峠」の辺りの雪景色がまたいいので、お勧めしたい。

恵比島(かつて朝ドラ「すずらん」の舞台になった「明日萌＝あしもい」駅)を過ぎると、「恵比島峠」を越えて留萌市域に入る。並走する国道233号が越えるのは「美葉牛峠」。同じ稜線の峠で、すぐ近くなんだけど、方や北竜町にあり、方や沼田町にある峠である。美瑛町の「美馬牛峠」とは一字違うよ。

この「美葉牛峠」なんだけど、どうして「留萌峠」にしなかったのかな。たしかに、峠の東側の麓は、「北竜町美葉牛」という地名だ。反対側の留萌側の麓の地名は「留萌市峠下」という。「峠下峠」もおかしいけれど、「美葉牛峠」を美葉牛の人は通らない。通るのはもっぱら留萌の人だ。



おっと、留萌本線に話を戻して、恵比島峠(こちらは沼田町域)は列車がよっこらよっこら登っていく。途中小さなトンネルを二つくぐる。そして峠を下りたら「峠下」駅。次が「幌糠(ほろぬか)」。この辺りの雪景色は実にきれいです。紅葉の時期も勿論きれいなんだけど、針葉樹林が雪をかぶった山の冬景色はホントにきれい。「留萌市幌糠」といえば、一冬に何度も「全道一の最低気温」「全道一の降雪量」などが報じられる地域です。旭川の江丹別みたいなところかな。留萌の市街地は雪が「下から」降るといわれるほど吹雪くんだけど、幌糠辺りはしんと積もる。だから樹影の形どおりに雪をかぶる。

そしてもう一つの見所は、線路脇の電信柱、電柱が、かわいい。今時なおも木製の、タールをいっぱい塗りつけられて黒光りする古い電信柱で、斜めのつかい棒(支柱)が支えている。まるで、運動場で子どもたちが一斉に「休め」の姿勢を取っているように、垂直+斜めの電柱が規則正しく並ぶ姿がしばらく車窓を楽しませてくれる。あんまりこういう路線はないんじゃないかな。今は多くはコンクリート製の電柱で一本立ちが多い。ボクは宮沢賢治の「月夜の電信柱」の絵を思い出します。これも廃線になると、あんまり見られなくなるんだなあ。勿論、並走する国道からも少しは見ることはできるけれど、線路のすぐ脇、至近距離から見られるからねえ。

以上、地元以外からの乗り鉄や葬式鉄(廃線になる路線を乗りに行く人をいうらしい)には分からないであろう留萌線の魅力をお伝えしました。この冬が最後のチャンスです。

ついでに、深川名物ウロコ団子を食べたことのない人はぜひこの機会に(⇒11月27日曜日、北海道新聞別刷り版に大きく特集されていました)。



最後に、やっと本に関する記事。本校には所蔵していないんだけど、こんなのもあります。恵比島峠辺りを舞台とした、ミステリーで、わりと最近出た本です。タイトルが今ひとつ洗練されていないと思いますが……。

『留萌本線、最後の事件』 山本巧次 ハヤカワ文庫JA

介護〇〇は増え続けるのか？

介護保険による、要介護・要支援の度合いを改定する検討を始めるというニュースがあった。要は、介護保険の利用者が増えて国の支出が膨らむから、それを縮小する(できるだけ介護保険の対象者を絞る)方策なのだという。

一方、利用者(介護を受ける人)からも利用料の徴収を増やす方向らしい。もちろん、現役世代の介護保険料も上がって行くに相違ない。事実、40歳になって徴収され始めた頃の介護保険料は、月2,000円くらいだったはずだが、いまや4,000円を超え、2倍以上になっている。こうなると、言葉は悪いが「やらず、ぼったくり」の感が否めない。

消費税を10%に増税したのは、社会保障費を賄うためではなかったのか。もう賄いきれなくなったのか。それだけ、少子高齢化が加速しているということなのか。

少子化は、ゆくゆく生産年齢人口の縮小となり、税収の減少、インフラ整備の縮小、社会保障の縮小、なんでも縮小の国になってゆく。このまま水道管は維持されるのか。すべての川にかかる橋は、いまのまま100年後も残っているだろうか。すでに日本の総人口は減少し始めている。もちろん、介護・福祉分野の人手不足も深刻だ。



いま、介護分野の専門家がおそれているのは、「介護心中」「介護殺人」「介護虐待」などの増加と、「ヤングケアラー」の増加だそう。介護施設を利用できなくなって追い込まれた人、いわゆる介護難民が行き着く先を案じているのだそう。

推薦入試の小論文課題のテーマには、頻繁にこの問題が取り上げられている。

1・2年生の諸君は、この問題にも関心を持って「知り」「考えて」いくことをお勧めしたい。受験直前になって「ヤングケアラー問題の解決策について考えるところを述べよ」と問われて、「介護施設を増やせばいい」と答えているようでは、ものを知らなすぎだ。

初代からの伝言

さむい。でも、コロナ第8波流行には「換気」が一番の予防対策だと。その証拠に、北海道、旭川といったさむい地域の感染者数が一向に高止まりのままじゃないか。そういう論調が多くなってきたように思います。コロナ第8波とインフルエンザの同時流行が懸念されています。しかし、燃料費も高騰しているから、暖房も抑え気味なんでしょう。でも、換気が基本の対策。ああ、このジレンマ!

かてて加えてミニスカブーム。

初代のミニスカート世代の叔母さんは言っていました(半世紀以上前の高校生ね)。年取るとね、身体に響くから(神経痛とかね)、学校の生徒にはくれぐれも足腰冷やすかっこうするんじゃない、後悔するよって言っときなさい、と言われたことがあります。いちおう、お伝えしておきますね。年配者の言うことは、一応耳に入れておきましょうね。なんといっても「経験」に裏打ちされているというのは、強いんだから!

ボクらの頃は長いのがトレンドでした(くるぶしが隠れるくらいの長さのスカート!). 短いスカートがどのくらい寒いのか解りませんが、素足はさすがに寒いでしょうね。そんなところに頑張らずに、もっと日ごろの勉強に頑張っていたきたいものであるが……。とかく若いうちには無駄なところにエネルギーを使いたがるものではあるな。



痛い!

痛い。指のあかぎれと言うんでしょうか。もう両手の指という指がガッサガサの枯れ枝のようになっていてあちこち切れているので大変。爪の両側には裂傷のような傷も。

ちょっとどこかに触れても激痛が走る。コピー機のパネルの紙サイズや枚数なんか、うかつにタッチできない。イテテテテ。

不織布マスクをゴミ箱にばいと入れたつもりが、指先がガサガサなので、ゴミが手を離れずまた戻ってくる。あさ起きて、タオルケットをはいだつもりが、指にくっついて戻ってくる。指先がマジックテープ状態!

チョークはことに傷口に塩を塗るようで痛い。

リモート授業の端末画面にタッチしても反応しない。スマホの画面も反応しない。指紋認証も反応しない。もう「お前はもう死んでいる」状態です。たしかに、冒頭「痛い」と打ったら、「遺体」に変換された。笑えない予測変換ではある。

ああ、キーボード叩くのも辛くなってきました。

後日。洗い物にゴム手袋をするようにしてから、だいぶん良くなりました。なつかしいなあ、ゴム手袋。子どもの頃は給湯器なんてなかったから、ゴム手で洗い物してたっけ。二層式洗濯機の脱水機に移すときにもゴム手は活躍しました。あさは茶碗を洗って、晩の米を研いで学校へ行ったものですが、その習慣はいま甦り、出勤する前に流しはきれいにしてお出かけます。若い頃の習慣って、大事だと思うこのごろ。

言葉のお兄さん

朝の某テレビ局で、ほんの数分、「北の言葉のお兄さん」というミニミニ番組が流れます。お兄さんと言うよりも立派なオジサンなんです。先日「文頭の**なので**」を取り上げていました。

この図書館だよりでも書いたことがありますし、3年生の「文章表現」という授業でも言っていますが、文の頭に「なので」を接続語のように使うのは、まだまだ市民権を得ていない。若い人には違和感はないかもしれないが、中高年者には違和感がある、改まった場では使わない方が良く、と「言葉のお兄さん」も言っていました。

この言い方はかなり最近ひろまった日本語だと思います。漱石も芥川も使っていませんし、ボクも使いません。しかし、相当使い勝手が良さらしく、当の〇HKのキャスターたちも平気で「なので」と言っているようですが、少なくとも**文章語には使わない**方が賢明です。

新聞切抜き拾い読み

ここに上げた記事は、図書館前掲示板に掲示中です!

館内には北海道新聞(当日)・朝日新聞(前日)・あさひかわ新聞(週刊)の3紙があります。新聞を読む習慣を!



▼「草木減り ヒグマ肉食化」 北海道新聞 11/25

標茶町、厚岸町近辺で、放牧中の牛を60頭以上も殺した、「OSO18」と名付けられたヒグマが話題です。もともとヒグマは虫や木の実、草食なのだそうですが、この熊はなぜか「肉食化」したんだそう。その理由として、ふえすぎたシカ問題があるという。熊が食べていた草木を、シカがみんな食い尽くしてしまう。シカたなく、熊は猟師が放置したシカの残骸、クルマや列車と衝突した後、どこかで落命したシカの残骸に味をしめ、ついに放牧牛を襲うようになったのだらうと言うことです。

ヒグマの話としてはこの作品。北海道で起きた実話。世界最大の猛獣被害事件とされています。

『**熊嵐(くまあらし)**』 吉村昭 新潮文庫 ⇒文庫の棚「よ」

冬休み長期貸出 12/19(月) ~ 1/13(金)まで

ひとり5冊まで! (延長したい場合は一度返却の手続きを)

そうだ! 図書館へ行こう! 冬こそ読書!!

(文責 伊丸岡圭一)